

言葉に立ち止まって読む



INTERVIEW

言葉の意味を楽しみ、探究すること

令和2年度版教科書の新教材「言葉の意味が分かること」(5年)の筆者でもある今井むつみ先生。本誌では、子どもが語彙を増やすために必要なことについて伺いました。



撮影：鈴木俊介

いまい 今井むつみ

慶應義塾大学環境情報学部教授。専門は認知科学、言語心理学、発達心理学。著書に、『ことばと思考』『学びとは何か——〈探究人〉になるために』(岩波新書)、『言葉をおぼえるしくみ』(ちくま学芸文庫)などがある。

今号のテーマは、「言葉に立ち止まって読む」こと。インタビュー、実践報告、提言を通して、子どもたちの語彙の拡充と「読むこと」との関係に迫ります。

言葉のセンスを育む

——先生は、*認知科学の見地から、子どもたちが言葉を覚える仕組みについてご研究されているそうですね。

子どもたちが言葉を理解し、さらに自分で使える言葉を増やしていくためには、どういう学習が必要なのかを研究しています。今まで幼児を対象に研究をしていましたが、最近、力を入れて研究するようになったのが、外国をルーツとする子どもたちです。母語ではない日本語を学ぶときに、何が難しいのか、日本語を適切に使うためには何に注意しなければいけないのかといったことを研究しています。

——そういう研究を通して、どんなことが見えてきたのでしょうか。

言葉の理解のしかたというのは、大ざっぱにこういう概念だなということが分かるレベルと、

きちんと使えるレベルでかなり差があります。それは外国の人と日本語で話していると、随所に感じます。

例えば、私が、ウズベキスタンに旅行に行ったときのことです。現地で日本語を話せる方が、ツアーのガイドについてくれました。その彼女が、ツアーの中で、金色の美しいイスラムの建築を「金だらけのモスク」と説明しました。それがすごく興味深かった。「だらけ」の意味を外国の人や子どもに教えようとすると、「○○でいっぱい」などとしか説明できません。でも、この文脈で「金だらけのモスク」と言ううと、きれいなモスクが台無しになってしまう感じがする。

同じ「金でいっぱい」という意味の言葉でも、「金まみれ」はもつとそぐわないし、「金尽くし」も少し違う。この文脈では、「金の装飾が施されたモスク」や、「金をたくさん使った豪華なモスク」と言うといいのですが。外国の人に限らず、これから言葉を習得していく子どもたちにとっては、そういう運用も含めた言葉の力が必要だと思っています。

——状況や文脈を含めた理解が大切だと。

そうですね。ポイントは、その言葉と似た言葉を知っていて、「この状況ではこれが適切だ」という判断ができることですね。たくさん経験を経るという——私はいつも「センス」と言ってしまうんですけど——言葉に関しての感覚を育むことが、大事だと思います。その感覚があると、自分で本を読んでも、そこからいろいろと言葉を学ぶことができる。

特に小学生は、読むことから非常に多くの言葉を覚えていきます。文脈から意味を考えて、それを記憶し、その蓄積が言葉の意味の知識になる。それは一個一個の単語の知識を超えて、言葉のセンスを育むことにつながります。

——文章から自分で学んでいける力をつけるということですね。

語彙は無限にあるので、必要な語彙を全部教えることはできません。教科書で扱われる語彙は精選された語彙ではありますけれど、それだけでは足りないわけです。だから、大事なのはテキストを読んで、文脈から推測して、言葉の意味を広げていく感覚です。

——自分が知っていた言葉だけど、この文章では

違う使い方をしている。そのときに、意味を推測するだけではなくて、辞書を引いて楽しむ、そのような習慣があるといいかないと思います。そうした中で、新たな言葉との出会いも生まれ、語彙が増えていくのです。

学校で育てる言葉の力

——国語の授業では、どういう工夫をされていますか。

以前、「たんぽぽのちえ(二年)」の授業を見ていたときに、とても感心した場面があ



*認知科学……知識の獲得、学習、記憶、推論の仕組みや情報処理の機構を、心理学、言語学、計算機科学などの幅広い分野にわたって研究する学問。

りました。その授業では、先生が、教材の中に出てくる「しぼむ」という言葉と、「すぼむ」という言葉がどう違うかを聞いていました。多くの子どもたちが、「しぼむ」と「すぼむ」を混同していました。

そのとき、先生が『すぼむ』はどういうときに使いますか』と聞いたんです。すると、一人の子が「傘をすぼめる」と言いました。先生はさらに、「傘をすぼめる」と言うけれど、傘は『しぼむ』と言いますか』と聞きました。そうして、子どもたちの中で、わいわい議論が始まりました。傘をすぼめる動作をやってみて、それがたんぼの説明でなぜかわれるのかなどを議論し、自分たちで『しぼむ』と『すぼむ』の違いを考えていました。

——先生が問いかけたからこそその議論ですね。問いかけないと、何となく通り過ぎてしまいますね。その先生は、『すぼめる』と言いますが、『しぼめる』と言いますか』という問いも投げかけていました。そこから『すぼむ』には『すぼめる』という他動詞の形があるけれど、『しぼむ』にはない、ということにも気づいた子どもがいたかもしれません。もちろん

をしたときも、算数の問題で使われるような「等しい」といった言葉になると、ときめんにわからなくなりました。

——日本語を母語とする小学生は、どういう言葉に「つまずきやすい」ですか。

まだ予備調査の段階ですが、言葉の意味を理解したり推測したりする力が弱い子が、

授業では、他動詞、自動詞などの言葉は使いませんでした。とても重要なポイントだと思いました。ああいう授業の中で、言葉のセンスが身につけていくんじゃないかと私には思えました。

——教室で、言葉に立ち止まる感覚を磨いていくわけですね。

もちろん多読的に全体の内容をつかんで楽しむ読み方も大事です。でも、言葉に立ち止まって深掘りしていくことも大事。授業の流れの中のどのタイミングで、どの言葉をどう取り上げるか、とても大切な工夫だと思います。

例えば、「触れる」と「触る」がどう違うのか。両方ともすごく日常的な言葉で、重なりて使う文脈もかなりありますが、その微妙な違いについて、動作化したり、使い方を比べたりしながら考えるなどおもしろいですね。

つまずきやすい言葉

——中学年になると、文章を読むことに抵抗を感じる子が増えるとも聞きます。

どういう言葉でつまずくかを調べています。

例えば、生活でよく使う、「借りる」という言葉は、言葉の力が弱い子でも100パーセント理解できています。いっぽう、「うなずく」「かしげる」といった言葉は、言葉の力が高い子との間で如実に差が出ます。「使用する」の意味も、選択肢から「使う」を選んでほしいのですが、「用意する」を選んでしまう。その辺りの細かい概念の区別がついていません。「口が重い」「熱い友情」といった慣用的な言葉も子どもによって大きく理解が違います。

——正答率に差があるのは、やはり、文章の中で出会う言葉ですね。

そうですね。幼児期にどのくらい本を読んでいたかといったアンケート調査もしていて、今後その調査との関係も明らかにしようと思っています。

これからの子どもたちに

——二〇二〇年から、小学校でも外国語（英語）が教科となります。

言葉を探る感覚を、母語でもついている



「九歳の壁」は、ほとんど全ての教科にあります。国語もそうですし、算数は特にそうです。低学年のうちにはビジュアルな補助があったり、日常生活体験に結び付いている言葉がほとんどだったり、分かりやすいんです。それが四・五年生になると、内容が抽象的になって、教科書の言葉も抽象的なものがどんどん増えていく。外国をルーツにもつ子どもに調査

ことは、英語の学習にプラスになると思います。

実際、私の大学院にいる中国の学生さんに、日本語の、それも中国の人が意味や使い方を誤解しやすい言葉をたくさん集めて、どれだけ理解できているか、使えているかをテストしました。それと同時に、母語である中国語で、かなり難しい言葉の力を測る問題もやってみました。その関係を見たら、母語である中国語において、言葉に感覚鋭く、的確に語を使い分けることができる人は、日本語でも、特に中国の人が間違えやすい言葉がちゃんと使えている。

だから、国語は英語のためにも大事なんです。というか、国語力がないと、英語は学習できないと思います。

——これからの時代を生きる子どもたちに、どのような言葉の力をつけてほしいと思いますか。

言葉は教えられるものではなく、探究していくものだという感覚を育ててほしいですね。私たち大人にできることは、無限にある言葉の中の二部を使って、子どもたちに、探究の入り口を示すことではないでしょうか。

